

令和2年度ときめき短歌大会入賞作品一覧

一般の部

【特選賞】

四六三 国境の笑顔のために選んだ道資格を手にし国際ナースへ

九八七 「行つてきます」響く挨拶朗らかに小さな靴が駆けていく音

【正賞】

二九 切られたる幹より生づる若枝の命のごとく生きてみないか

二八四 家事のあと資格取るため勉強を頑張る母は私の手本

三二一 グローブの隙間から見えた青空は勝利を掴むひとつの合図

四六六 夢を追いただひたすらにペンを持つ白衣に込めし二十二の冬

五五七 今日もまた秘めた想いを言えぬまま刹那流れた星に願いを

五九三 バイト後の母の手料理あたたかく独り暮らしの行く先思う

九六五 週一回食材届けに祖母の家楽しい会話と明るい笑顔

一一四六 金木犀香り薄れる霜月の寒さに偲ぶ淡き思い出

【准賞】

一〇 前髪を揺らす秋風ほの温く君とのさよなら受け入れられそう

二三 この道の先には桜咲くだろう今日も励めと夜食のにぎり

二六 もう風は秋の静けさ公園のベンチで迎え待つぬいぐるみ

一〇二 ふんわりと金木犀の香る帰路季節の変化感じて歩く

一二五 白すぎて秋の一部になりきれず脱ぎ捨てられるスニーカー

二四八 コロナ禍で外出自粛続く中今や恋しい人との関わり

杉山 みな子

須永 可恋

飯田 美和

木村 実葉

畑村 拓也

椎名 奈那子

夏乃空

渡辺 舞

倉林 由依

谷 碧

木下 美樹枝

齊藤 淳子

中根 真由美

山本 萌衣

今井 華鈴

都丸 愛朱香

- 二五五 成人し父と晩酌心地よい頬を赤らめ会話が弾む
 梅堀 真衣
- 三二九 ひんやりと夏でも感じるこの家に今年の冬は灯りがともる
 関 遥香
- 三三一 マスク下口が見えない不安感私の気持ち届いてますか
 五十嵐 琴音
- 三四四 心込め育てた苺収穫し楽しみに待つ祖母のイチゴジャム
 川島 未蓮
- 四三一 ばあちゃんと手繋ぎ歩く散歩道耳を澄ませば朝霜の音
 関 晴花
- 五三七 朝寒し窓から入るからつ風群馬で過ぎす初めての冬
 岸 千春
- 七六六 自粛期間祖母と取り組むパズルや塗り絵家族と過ぎす貴重な時間
 萩原 麗奈
- 八四三 目が合ったただそれだけで頑張れる明日は声をかけてみようか
 本木 優作
- 八六六 夕ご飯今日の出来事話しながら当たり前でも幸せ時間
 舘野 智尋
- 九三四 おかえりと駅で待つ祖母にこにことただいま言えば笑顔深まる
 矢野間 理花
- 一〇三三 いつまでも続くと考えた君との日濡れる枕を明かりが照らす
 飯塚 紀乃
- 一三〇七 いつの日も私を支える父と母今こそ伝える感謝の言葉
 北爪 茜
- 一三二五 近づきたい気持ち抑えて距離キープ収束したら君の隣へ
 飯塚 光希
- 一三二七 ジイちゃんの昔からの口ぐせは二十歳の私と酒を飲みたい
 大前 棕汰

シニアの部

【特選賞】

- 九二 来年も畑に立てるやうす日射す窓辺に野良着のボタンを付ける
 堀越 フサ子
- 三二八 歳月は悲しみいやす術なるや微笑む遺影に微笑み返す
 川野 忠夫

【正賞】

- 六四 終活で残す記録の一章は戦地の父へ送りし手紙
 眞庭 義夫
- 一九四 なにげなく覗く鏡になつかしき母似の老女ほゝえみくれる
 佐藤 洋子

- 二一七 道普請役にたたねど行かなければ心配さるる一人居老婆
 三四一 叩くやう刷毛は使へと亡母の言頭ちて小春の障子貼り替へ
 三九九 小さきラジオ話題とぎれず働きて世界を繋ぐ友となりたり
 四四二 独り身の吾に縁なき母の日に紫陽花の花今年も届く
 四五三 秋の夜や光にめくる広辞苑我が歌心又目ざめたり
 五八一 「明日からは俺の仕事」と夫は言いゴミ出しカレンダーを三度見直す
- 高橋 ひろ子
 石井 省三
 佐藤 瑞恵
 保坂 スミ
 石坂 作次
 國定 美子

【准賞】

- 五 光さす暖かき居間朝刊の文字追ふ母の背筋伸びをり
 四七 一瞬の命と思う水玉は稲の葉先に光りて見せる
 八四 ぶれぬよう姿勢を正し真つ直ぐに歩みてゆけり朝の歩道に
 一三二 朝つゆを払いもぎ取る手の平に初なり茄子の紫滲む
 一六八 瀬の音を聞きつつシルバカーを押すどんぐり栃の実まるぶ散歩道
 二〇四 二十本のたくあん漬ける老いの手に利根の河原の古里の石
 二四〇 空き畑の草刈る農夫の残したる立葵の花濃き紅に
 二四七 湯気の立つみそ汁夫と啜る朝変はらぬ二人の半世紀あり
 二九一 亡き母の箆筒の隅に石鹸のひとつづつ置かれ微かに香る
 三五二 祖母が織り母の仕立てし銘仙の緋模様を昭和を偲ぶ
 三五三 ゐろりより「ぶち」を掘り出し灰はたきむしり食べにし藤原はるか
 三五九 「いつ来るの」妣の留守電思ひ出す帰りゆく子を見送りながら
 三六一 移りはげし今の世に生命永らへて辞書を片方にパズル解きをり
- 笠原 正志
 角田 親俊
 秋山 充利
 藤井 登喜枝
 國元 百合子
 須田 庸一
 林 千恵美
 木暮 ヒサ
 須永 正江
 木村 あい子
 熊澤 峻
 木暮 ヨシエ
 細井 二三四

- 三八〇 庭中に溢れんばかりの金木犀香りの中にふとんを干せり
- 三八八 入院の姑の不在にわれのみの昼餉は今日も一片のパン
- 四一九 悩みごとあると無心に鍋磨く嫁から婆へ歳重ねても
- 四五一 吾が婚に使ひし帯を孫に継ぐ晴れ着詠へ成人の日待つ
- 四八〇 広き庭と畑を守り幾春秋夫なき家に米寿を迎ふ
- 五九二 茶をそそぐ音も会話の老いふたり広き火燵で雨の音聞く
- 六〇六 鈴生りの蜜柑に撓む枝先を触るれば植ゑし亡き父の頭つ

高齢者賞

【群馬県長寿社会づくり財団理事長賞】(最高齢者男女各一名)

- 五五 夕焼けの燃ゆる大空其の赤をわがもの顔に赤蜻蛉舞ふ
- 五六 沼岸に抜き足差し足鷺寄りて知らぬが仏群れ稚魚襲ふ
- 三〇 還暦となりて学びし短歌詠みて歌集は自分史白寿となりて
- 三一 四世代八人家族の我が生活最高の幸白寿を迎う

【ときめき賞】(理事長賞を除く年齢上位の者男女各五名)

- 二五七 いっしらに白寿となりてわが生きる長きものかなオリンピック
- 二五八 わがおもふ白寿となりてつつくみぬ人生おごらずわが道を生く
- 四九三 夜の施設涙拭いし介護士の優しいまなざし我が孫と似て
- 四九四 伊豆の旅海山の富士帆掛け舟露天風呂にてうっとり眺む
- 三四五 不自由を感じず歩く我がいる夢と気付きし朝のむなしき
- 三四六 それ程に重きとしらずすごしおりペースメーカー植込みとなる

- 塚越 郁子
- 善如寺 裕子
- 中西 好江
- 石坂 喜美江
- 金井 晶子
- 小林 智恵子
- 根岸 節子

三田 善四郎 103歳

立川 ツヤ子 99歳

吟柊 99歳

井野 明子 97歳

恩田 つね 97歳

- 八二 早朝に一杯の水ごくごくくと五臓六腑にしみ己いとしむ
- 八三 嫁が言う「蟬が鳴いている」息子言う「聞こえなくても鳴いているんだよ」
- 一九八 コロナ禍や憂き事のみが多かりしが稲穂は今年変らず稔る
- 一九九 面会もならず病舎に夫は今何を思うて寝てか起きてか
- 一四四 平安も現世も同じ人は皆恋に生きるは生への証
- 一四五 ときめいて我に未だある「恋心」言葉をバネに余生を生きる
- 四〇九 生きるとう籤に当りて詫ぶという重労働の七十五年
- 四一〇 新型のコロナウイルス怖からず爆弾の雨潜ったじやないか
- 二八五 足腰の弱りて意識す散歩道友と出会うも素振りは見せず
- 二八六 忠禮武信質受けし若き日の卒寿越えての深き意味をば
- 二四 厳冬の冷たき風を頬に受く雪雲厚く巷に重し
- 二五 結ばれて艱難辛苦の六十余年至福の余生毘びに生く
- 四二三 利根川原雑木林の夕暮れに君と交せし熱きくちづけ
- 四二四 君抱きそつと触るるや稚乳房目合ひこと永久の想い出
- 木暮 トモエ 96歳
- 萩原 まき子 96歳
- ひろし 96歳
- 中村 幸生 95歳
- 茂木 富男 94歳
- 小池 光男 93歳
- 春幸 91歳